
膨大な過去の一点(きらめき)

紅ノ芽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

膨大な過去の一点きらめき

【Nコード】

N9358P

【作者名】

紅ノ芽

【あらすじ】

ある1月の寒い日。

彼はシャワーの仕度をしようと2階へ戻った。

今晚は見たいテレビ番組がある。

それに間に合わせてシャワーを済ませる・・・つもりだった。

部屋に入るとそこには見たことのない異様な世界が広がっていた。

上から何者かに見られている彼。

見ている彼らもまた人であることには変わらない。

そこは現在と過去の間、灰色で白いおかしな場所だった・・・。

1話（前書き）

こんな小説も書いてみました。

中学3年生のときに書いたものですが、アイデアに困り12話までしか書いていません。

続きは追々かいていくので、もしよろしければ12話までですが感想をお願いします。

1話

今日は寒かった。

この場所も冷たく感じる。

白がかった灰色の階段を上りながらそう思った。

足取りもなんだか重い、そう感じるだけ。

斜め下を見ていた、ほんの数歩先のみを。

ここでこけると頭からかあ。

なんて思いながらゆっくり階段を上る。

手はポケットの中。

上はコートで包まれていて暖かい。

下は制服だけでなにもない。

口元はマフラーで覆っているため少し蒸れてるがあったかい。

それでも手だけは妙に冷たかった。

そんなときに限って手袋を忘れる自分。

なんだか情けなく思った。

ずっしりとした温かいため息が顔の辺りを漂う。

そんなのは一歩、前に進むだけでどこかへ行ってしまう。

タンと左上靴で階段の終わりを踏みしめる。

そのまま少しすり足で教室へ向かう。

なんとなく気が重い1月のある月曜。

8時ちよつと前、廊下にて、またため息がこぼされた。

その後少し正面を向いてみた。

ほとんど人はいない、その少ない人々はみんな教室にいる。

どのやつも窓側の暖房へくつついている。

自分も早くそうしたくなり急ぎ足になる。

さっきの階段は教室からは遠いが下駄箱からはすぐ近く。

教室が一番はずれにある1組。

後数メートルに差し掛かった。

見てみると、自分の教室はもう明かりがついている。

明かりは見ているだけで暖かくなる錯覚がある。

内面焦りながら、外見冷静に教室へ入った。

まず目に入ってきた情報は、担任の先生だった。

彼女はこう言う。

「おはよう。今日は寒いわね」

「そうですね。手袋忘れて大変でした」

嘘笑いの苦笑いで先生に顔を向ける。

「寒かったでしょ。風引かないようにね」といい教室を去る先生。

先生の靴は新しいのかキュッキュと音を鳴らしながら遠くなっていく。

ふんつと鼻で一息入れて歩く。

窓側にある自分の席にカバンを投げ置き、コートなどを教室の後ろへかけた。

他のやつ同様、暖房にへばりつく。

暖房は意外と熱く2、3分でへばりついていて背中が暖まった。

さすがに手はかざすだけ、つけたらきつと反射が起きてしまう。

「あつっ！」とか言っ手をとつさに離すだろう。

暖房に手はかざすだけでいいと初めて憶えた。

でもそれはほとんどの場合、学校だけに言える。

家ではそんな事ない。

入り口に背を向け手を温めているとどんどん時間が過ぎていった。

人が入ってくるのはわかっていたが、振り返ったときにこんなにいるとは思わなかった。

ほとんどの机がカバンで埋まってる。

みんないつもより早く来ているらしい。

窓側の席の一番後ろ、そこはまだ埋まっていない。

「那須はまた遅刻か」ひとり言。

手をこすり合わせ自分の席へ戻る。

椅子に手をかけた瞬間、チャイムが学校内外に響いた。ガタガタと音を立てるこの教室。

ある程度静まってから1、2分、先生がドアを開けた。

「起立、礼」クラスの委員長が言う。

そろわない多少ざわついた「おはようございます」。

先生はいつもどおりの挨拶でそれに応える。

後ろの席はまだ空いている。

全体を見わたす先生。

そして言う、「はい、那須君遅刻だね」と。

ほんとに毎度のことで欠席とも言わない先生、そしてクラスメイト。慣れてしまったのだ、那須の遅刻癖に。

他に休みがいらないか見わたす先生。

いないと分かり笑顔でこういった。

「今日は7時間目に集会があります。最近多くなったトイレのタバコに関してです」

そういうと皆は面倒くさそうな態度をとる。

もう何回目か、この話は。

夏からの話題だったこの話、もう旬ではない。

困っている先生方を見たい悪共が増えたらしい。

だからまたこの話だそうだ。

これは友達からの話。

そんな事を頭でめぐらせていたらいつの間にか先生の話の話題が変わっていた。

「風邪を引かないようにしましょう。では終わります。委員長」

そういうとどこからともなく「礼」と聞こえた。

その場で頭を下げる、朝の連絡事項が終わり先生がここを去る。

それと入れ替わりで後ろの戸から入ってきた男。

那須、到着。

2話

走って席に着く那須、それに近寄っていった。彼に呼びかける。

「よ、今日は何で遅れたんだ？」

那須は息切れ気味に答える。

「今日は・・・ちよつ・・・としたことが・・・あつて・・・」
途切れ方がすさまじい。

両手のひらを彼に向けてまあまあとなだめる。

笑いながら彼に言う。

「んでそのちよつとしたことってなによ？」

彼は「目覚まし時計が木っ端微塵に解体されてて・・・」という。
なので「つてな夢を見ましたってか？」と突っ込んでみたりする。
実は凶星だったらしい。

寒さのせいではなく、少し顔が赤くなった。

那須は言う。

「人の落ちを取るなよ！そこが一番大事なんだよお」と。
今度は苦笑いでまあまあとなだめる。

そんなこんなで一時間目のチャイムが鳴った。

席に着き勉強道具を用意する。

これを4回繰り返し返した。

そしてやつと昼休み。

授業の内容なんて全くと言っていいほど憶えてない。

楽しみは昼休みと放課後と、休みの日。

そんな男と那須。

男の名前は西崎 彩、女みたいな漢字だが読みは“さい”。

美術が中学からずっとオール5。

5段階評価で5は一番いい。

そつ、美術だけ。

もう一人、那須 尚人。

愛称“物理馬鹿”。

物理ができる男、授業にでてなくてもわかってるから驚き。
先生方からは野菜の茄子とアクセントが同じなので色々いじられる。
特に多いのが茄子科の植物。

トマトとかって呼ばれる、すると決まって那須はこういう。

「違うつての！那須だつて」と。

それが楽しい、もちろん先生もクラスメイトも。

昼休み問わず結構彼ら2人はいつしよにいる。

放課後も休みの日も。

今日は食堂で昼飯を食っていた。

那須がラーメンを食いながら言う。

「ああ、もう帰りたい」

カツ丼を頬張りながら彩も言う。

「おれも。あと3時間もあるなんて・・・地獄だな」

「確かに。でもいいじゃん、あと2時間全部美術だし、その後は集会だし」

そう那須が言うとき彩が箸を那須に向け頷いた。

どうやら忘れてたらしい。

「そついやそうだったわ、すっかりわすれてた」と笑う彩。

蓮華でスープをすすりながら笑う那須。

その隣に誰かがやってきた。

2人は気づかない、視界にも入っていないだろう。

隣のヤツはなんでもなく自分のを食べだした。

が、そんな時正面から急速に迫るものがあつた。

食べ物をお口へ運び前を向いたその瞬間、顔面に接近物が命中。

おでこが少し赤くなる、ぶつかったものを良く見てみるとそれは小さいビンに入ったコショウだった。

だが良く周りを見てみると中身が右斜め前にある那須のラーメンに

どばつと入っていた。

那須の顔もコシヨウだらけ。

ついでに制服の鎖骨辺りも。

那須がきれるまでそう時間は要らなかった。

蓮華を置き顔を拭く。

隣のヤツをみて一言。

「おい！なにしてくれてんだ？ああ？」

那須は問題児、遅刻のことでも喧嘩のことでも。

だから皆那須を怒らせないようにしている。

でもきれたら誰の手にも負えなくなってしまう。

隣のやつはそれを知ってか否か、慌てて首と両手を横に振った。

那須の心のようなコシヨウまみれのラーメンスープがそこにあった。

3話

パンツとテーブルを叩き怒りをあらわにする那須。

隣のヤツは驚きと恐怖のせいなのか那須と一緒に立ち上がってしまった。

それをみた那須は勘違いをした。

自分が立ち相手も立ったらこれはやり合いの合図だと。

こいつは自分とやり合うのだと思っただけらしい。

彼らの周りに少しの沈黙。

それ以外はざわめきで揺れていた。

妙に長く感じる間が終わったのは那須の行為からだった。

相手の胸倉を掴み顔を近づける。

上から見下ろす感じで相手を威嚇している。

おれは思った、いや周りも思ったはずだ。

そんなことしなくてもそいつはもう怯えていると。

すうっと顔を引いたかと思うとより一層掴んでいる手に力を入れている。

右手も左手同様ぐつと力を込めているようだ。

那須の体が動き右手が引かれた。

目を見開きながら歯を食いしばり右手を高速で打ち出す。

相手は目をぎゅちりつぶって歯を食いしばっている。

殴ったと思った瞬間に那須の体が静止する。

自分で止めたわけではない。

この学校で一番、が体の良い数学の先生が彼の拳を手で止めたのだ。しかもどんな業を使ったのか相手の顔約数センチ手前だった。

数学教師の睨みはこの場の空気を変えるほどだった。

間に入られた2人もおとなしくなる。

止められた拳は振りほどかれ、強ばった顔も元に戻った。

その後教師は小声で「わかってるな・・・」と言って那須と相手の

やつを連れて行った。

残された彩は自分のカツ丼を完食し、那須のラーメンと一緒に自分のもカウンターに下げ教室へ戻った。

いつも通り食堂を出てすぐチャイムがなり生徒たちを焦らせた。なんでも無かったかのように教室へ入り次の授業の準備をした。

5時間目、6時間目と時間が過ぎていったが那須は一向に現れる気配がなかった。

それどころかクラスメイトも那須の席を見ようとはしない。

本当に慣れてしまっているのだ、このことに。

とうとう集会前になって姿を現した彼は少しやつれているようだった。

先生の合図で廊下に並ばされる生徒たち。

もちろんおれたちも。

そしてその行列は体育館へ向かった。

階段をおり歩く歩く。

体育館に入ったとき一瞬オレンジ色になった周り。

ライトがオレンジ色のせいもあったが壁も木で作られているのか木目が見えている。

その色もオレンジに見えなくはない。

その中を進んだ行列はステージの前に縦に集められた。

全部で6つ、学年だけでの集会のようだ。

集会の内容は朝のホームルームで言われた通りタバコに関してのものだった。

10分程度で終わった集会、そのあと教室へ戻った彩と那須。

帰りのホームルームもなんとなく終わりやつと帰れると那須と2人で話しているとやつがきた。

数学教師が担任に何かを言っている、そして先生が言った。

「那須君、西崎君ちよつと職員室まで来なさい」

なぜかおれの名前まで増えていたが目の前で繰り広げられたことな

ので行かないわけにもいかない。

そう思い那須と2人で数学教師についていった。

数学教師がドアの中に入る、続いておれたち、そのあとまた違うドアに入った。

そこに広がる光景はまさに地獄だった。

先生方が目の前に4人、数学教師を合わせて5人になる。

その真ん中に構えるのが校長。

部屋の左端には昼間見た那須の相手がこちらを見ていた。

那須は慣れているのかなんでもなく目の前にあつた椅子に腰をかける。

彩もつられてその隣の椅子に腰掛けた。

校長が言う。

「どうして君たちはここへ呼ばれたかわかるかね？」険しい表情でこちらを見つめる。

おれはその見幕に押されタジタジとしていた。

それを見かねたのか隣の彼がこういった。

「わかつてる。あいつを殴ろうとしたことだろ？」と相手に指を指しながら強気的那須。

おれもそれに一応頷いた。

那須は続けた。

「それなら俺だけで良いはずなのに、なんで彩もなんだ？」今度は逆に校長に質問した。

すると「彼もあの子を殴ろうとしたそうじゃないか」とこう返ってきた。

おれは首を振ったが校長たちの視線は痛く突き刺さった。

那須は怒る。

「なにいつてんだよ！殴ろうとしたのは俺だけで彩は関係ない！」と。

だがそれを簡単に聞いてくれる大人たちではない。

一人の先生が言った。

「被害を受けたやつがそういつてるんだ、ほぼあってるだろう」と。

4 話

「そんなの当て付けだ！」怒りをむき出しにして教師方を見る彩。それでも全く考えを変えようとしない。

「むきになるな、余計怪しくなるぞ」とからかい半分で生徒へ視線を送る。

目の下の筋肉がピクツと動く、眉を集めて下を向いた。

その時ほんの微かに彩に殴られそうになったと言つ生徒が見えた。誰にも分らないように口元で笑っている。

堪忍袋の緒が切れる寸前那須が喋りだした。

「いくら言われようがこいつはやってない」はつきりと大きく声を出す。

鼻からのため息。

少しだけ間があつた。

すると真ん中の男、校長が話を切り出した。

「・・・わかった、やってないことと仮定させてもらおう。決めつけるものかどうかと思われるが？なあ、先生」と。

片眉を上げながらさつき彩をほぼ否定した教師へ顔を向ける。

その教師は「そうでしょうか・・・」と聞こえないぐらいの愚痴をこぼした。

一息ついて校長「よし、ここまでとする。今までのことを配慮した上で殴られたと言つ彼、そして君。」

そう言いながらゆっくり指を刺す。

「2人に課題を出すこととする。それで良いかな？」と言い右手の近くのペンを取る。

おれは多少あの教師へ怒りを残しつつも素直に頷いた。

だがやつはそうではなかった。

「なにを言ってるんですか、こいつらが殴ろうとしてきたんですよ？なんで僕まで・・・」とどこことなく先の教師に似ている。

だんだん声が小さくなつていく生徒。

ふんと一息入れて校長が何かにサインをする。

そして「それじゃ、解散。帰っていいよ君たち」意外と優しい校長がそこにはいた。

言われるがまま異様な空間を出るともう空は赤色。

帰るにはいい時間になっていた。

そして2人はグチグチいいながら帰って行った。

次の日、朝のホームルームの時間。

先生からの連絡事項などをクラスに公表するのがホームルーム。

担任の先生から3枚の紙を手渡されすぐにそれがなにか分かった。

校長からの課題だ。

一番表にあつたのが反省文。

まあベタ、そして2枚目を見る。

そこには空白ばかり。

何も印刷されてなかった。

疑問を持ったがあと1枚、この後ろに控えているのを見てからにしよう。

そう思った。

そして3枚目、そこには難しい文章は無く簡単な言葉で3つ書かれてあつた。

「1、白紙の紙にはどんな事書いても良いが正直な言葉を書いて欲しい。」

「2、これは今日の放課後までが期限となる。遅れた場合、君の意見は無いものと思つてよい。」

「3、あくまで話し合うのは君たちだ、決断をするのも。」

自分の中でそれを十分理解した、そして昼休みおれは一言だけ書き机の中にしまった。

そんな時、那須が声をかけてきた。

「よ、今日もあそこ行くと思つか？」と。

おれはうんと頷いてさっきの紙を見せた。

反省文は午前中に書き終えた。

おれは「ここ」といつて3枚目の紙の第2項を指差した。

「・・・今日の放課後って書いてるだろ？たぶんあるんだろ」

そういうと那須は少しくらい顔をした。

そしてポンと肩をたたいて「気楽にな」と言うようだった。

おれはわかるように少し大きく頷いて見せた。

放課後になって間もない頃、2人は教室で帰りの準備をしていた。

また職員室からの使者が来たらしい。

担任の先生が2人を呼び出す。

那須と彩は覚悟を決めて教室をでた、使者はあの数学の先生だった。

5話

つかつかと早歩きで先に行く数学の教師。

2人はただついて行くだけだ、彩は昼休みに記入した紙を左手で握っていた。

そのせいで、職員室のあの空間に着いたときには紙はもうグチャグチャ。

つつい苦笑いが出てしまう。

そのまま席へ着いた。

そこに居るべき者がいない、ふと気づいた。

おれに殴られたという生徒だ、やつだけまだ来ていない。

その後1分、後ろの扉からやつとやつを庇うあの教師がそろって入ってきた。

そして定位置へ着きいよいよ会議が始まった。

自分がさっき出したクシャクシャのもの、それを見ていく先生方。

自分でも気づかぬうちに生唾を飲み込む。

那須はずつとやつを見ていた、いや睨んでいた。

全員の教師が見終わると今度はやつを見始めた。

その間でも那須は睨んでいるみたいだ。

そして双方の紙を見終わった後、校長が一言言った。

「・・・なるほどねえ。それじゃ隣の生徒相談室へ移りなさい。そこで決断をしてもらう」といつて席を立った。

他の先生方も席を立ち残ったのは物理の先生、鎌田。

通称“蝶々(てふてふ)”。

蝶のはく製が好きだとかそういうことではなく、所有物が全て蝶だからだ。

髪飾りやシャープンにいたるまで、彼女のあちらこちらに蝶が止まっている。

そしてあのやつを庇う先生、安部。

那須、おれを入れたこの5人で隣の部屋である、生徒相談室へ移った。

当事者を席へ座らせて、傍聴者であり助言者である者たちは部屋の角に立つ。

てふてふが合図を出す。

「さあ、どうぞ。明暗はつきりさせてね」と腕を組んで言い放つ。

2対1、人数的にはこちらの有利だが被害者はあちらなのだ。

被害者はいう。

「あんた達はおれを殴ろうとした、それは事実だ」

いきなり嘘を堂々とぶちまける被害者。

そこへ那須のツツコミが入る。

「違う！おれだけが殴ろうとした。お前は間違ったことをよくそうやって言えるな！」

だんだんと怒りを面に出してくる那須。

おれは那須をなだめてあえて静かに力強く言った。

「おれはお前を殴ろうとしていない。・・・それが事実だ」

だがそんな生徒同士の争いの中一際目立つ低い声。

安部が口を出したのだ。

「お前らはいいい加減認めろ！自分たちが殴ろうとしたことをな」

とうとう那須怒りに火がついた。

ガタツと席を立つと、椅子が後ろに倒れた。

それをまたいで安部の前へ立つ那須。

おれは気づき那須を止めようと立ち上がる、もちろんそれをあの前

兆であることと知っているてふてふも近寄ってくる。

被害者はどうなっているのかわからなくなっているようだ。

怒りに火のついたやつを2人がかりで抑える。

安部もそろそろ気づいたらしく「お、おおお前！殴ったらただじゃ

おかんからな」といつて後ずさり。

おれ、鎌田の奮闘空しく那須に振り切られる。

すぐさま歩き安部の前へ立つ。

安部の背が高い、怖そうな奴に睨み下ろされるのと同等の怖さ。那須の睨み上げ。

眉を集めた彼の顔は般若の如く、背中に悪寒が走る。

息も途切れ途切れになるほど彼は恐ろしい形相になっているのだろ
う。

傍から見てもわかるぐらいに。

おれ、鎌田の2人はもうアレを止める術を知らない。

これからはただ見てるだけにしようとなんと2人で合図した。

その後まもなく那須の右手に力が入る、安部は怖さで全体が固まっ
ている。

とうとう被害者も理解できたらしく職員室へ勝手に駆けて行った。
もう手遅れなのに・・・。

そして那須は安部の胸倉を掴み、まさにあのときの昼休みの様。

一気に安部の顔面目がけ拳を打ち出した。

ゴツという鈍い音と共に安部が倒れこむ。

安部の口には血がにじみ那須の拳にも血がにじんでいた。

6話

肩で深い呼吸をする那須。

その時だった、入口のドアが開き、やつと先生方が入ってきたのは。教師たちの目にはどう映ったのだろうか。

倒れている1人、その目の前に立っている1人、少し離れて2人が棒立ち。

すぐさま取り押さえられる那須、そしてなぜかおれまで。

鎌田は誰かに連れ出され部屋の外で何かを聞かれている。

全くおれの耳には入らなかった。

那須は大人しく捕まっていた。

殴られただけなのにまだ横たわっている安部。

それをおれは部屋を強引に出されるまで睨み続けた。

その後、いくら弁解しても言い訳としかとられない。

処分はすぐに下された。

停学1週間・・・那須は2週間。

それからすぐに帰り支度をさせられ教師の車で家まで連れて行かれた。

おれの家には母親しかいない。

父親はおれが生まれてすぐ母親と離婚して行方知れずだ。

その母親はこの時間働きに出ている。

誰もいないと話すと教師は何時なら帰ってくると言う。

夜8時ぐらいだということならその時にでも電話させてもらうと言って帰っていった。

カバンから鍵を取り出しドアを開ける。

すぐに薄暗い廊下が目に入る。

奥のリビングは日の光で明るくなっている。

靴を無造作に脱ぎ捨てネクタイを緩めながらリビングに入った。

そこらにカバンを投げ捨てソファに寝転がる。
帰宅にはいつもより少し遅い時間だった。

夕日が目に入るのでそれを背にして目を閉じた。
ふて寝なので数十分と持たずに起き上がり冷蔵庫をあさる。
果物のゼリーを発見し少し笑顔になる。

しかし、賞味期限が2日過ぎていたのでどうしようか迷ったあげく
ゴミ箱へ捨てた。

また漁りだす冷蔵庫。

結局飲み物しかなかった、グラスを出しテーブルに両方を置く。
テレビのスイッチをつける。

流れるのはニュース番組、飲み物のふたを開けるとシュツという音が漏れた。

くるくるふたを回して開け、グラスの8文目まで入れる。

飲み物のふたを閉めることなくグラスのものを飲む。

ニュースではなにやら特集をやっていた。

最近の経済状況についてだった。

わけ解らなくなったので教育番組をつける。

呑気に英語を使って遊んでいる。

それを見ながら机にあごを置く。

数分その状態で学校でのことを考えていた。

でもこうなった以上どうしようもない、そんなことは分かっていた。
ため息を出しテレビの電源を切る。

カバンを持ち2階へ上っていった。

自分の部屋にカバンを置き、本棚からスケッチブックを取り出す。
机の上のペン立から4本鉛筆を選ぶ。

デスクライトをつける。

想像で描くいつもの行為。

感情で全て変わってしまう絵の質感、今日のは荒っぽい。

頭ん中がぐちゃぐちゃ、だんだんできてくる絵。

絵が完成した、悪魔のような顔をした天使。

そして気がつけば外は暗くなっていた。

下から物音はしない、まだ誰も帰ってきてないようだ。

腹も減ってきたので飯を作り到下へ降りた。

また適当に冷蔵庫をあさって材料を取り出し焼きそばを作った。

意外と美味しくできた、誰でも作れるが。

皿に盛ったものをテーブルの上に置き、カーテンをしてキッチンの明かりだけを頼りにリビングの電気を付けた。

椅子に座り久々の一人で食事。

別にまずくは感じられなかった。

7話

その後、食器を下げすぐに洗い2階へ戻った。

戻ってからはこちらとやってやるのが無くばーっとしていた。ベッドの上に寝転び、伸びをする。

その時、手に何かが当たった。

一瞬気にしなかったが、数秒考えやっぱり見てみた。するとそれはいつも読んでいるマンガだった。

ごろんとうつ伏せになり、それを読んだ。

このキャラクターを真似して描いたりしたこともある。結構長く続いているマンガだった。

どれぐらい時が経っただろう。

マンガが終わる頃には眠気が体全体を包んでいた。

それをいつものところへ置き、下へ寝支度をしに降りていった。

まだ誰も帰ってきてない、今日は残業があるらしい。

洗面所の電気をつけて上から持ってきた着替えを適当に置き、風呂場の電気をつける。

きちんと洗濯機に脱いだものを入れる。

今日は風呂ではなくシャワーにした。

数分身を清めた後、洗面所で歯を磨く。

その後台所へまた出てきて飲み物を一杯いただく。

これがいつもの日課だった。

今日は気分を変えてアイスを食べることにした。

冷凍庫を開けるとひんやりといい気持ち。

でも不快になった。

アイスがない、それどころか氷もない。

仕方が無いのでいつも通りにした。

時計を見て2階へ戻る。

丁度11時10分前だった。

自分の部屋に着いたときなんだか胸の辺りが気持ち悪くなった。一瞬風邪かと疑ったが、のどや鼻などには全く異常を感じない。気のせいだと自分に言い聞かせ部屋に入った。そのままベッドにダイブする。布団に包まり目を閉じた。

朦朧とした意識の中、どこかで目覚ましが騒ぐ。

数秒我慢して寝ようとしてみたが実らず、飛び起き目覚ましを止めた。

時刻を確認する、もう8時だった。

やばいと思ったのも束の間、一気に何かに止められるように動かなくなる空間。

そつえばと思いついてみた。

「・・・ああ、停学中か」と真顔で一人頷く。

停学してから迎える初めての朝。

慌ただしかったので母親もどうしたのと起きてくる始末。

ただ一言「なんでもない」といつて首を振る。

そしてあのことを口から出した。

「実はさ・・・停学になったんだよね」と少し笑いながら照れながら言う彩。

すこし固まる母親。

鼻でため息、困った笑い顔で言った。

「笑って言わない。それじゃ戻ったときに大丈夫なように勉強しときなさい」

頷きながらわかったと合図する。

するといきなり何かに気づいたのか目を丸くした母。

「ああ、そつえばそれっていつも何時にセットしてるんだっけ？」と聞く。

彩は「8時だけど・・・なに？」と返すと叫び声のような声を上げて忙しそつに階段を駆けて行く。

今度は彩の方からため息がもれた。

パーカーをはおり寝間着のまま下に降りてった。
リビングはもう騒がしいこと、騒がしいこと。

やれ化粧だ、やれ支度だと。

その中をゆったり進んでいきキッチンへ着く。

それから食パンを2枚取り出し、その間にレタスといつも冷蔵庫に
作り置きしているミートソースを入れた。

オーブンで2分、ちょっと薄い狐色の自家製パンができた。

皿に盛りテーブルに置く。

大声で「飯できたよ。テーブルにあるから勝手に食べて」というと
どこからかありがとうと聞こえてきた。

おれ以外全ても通りの日常だった。

8話

その日の朝は授業が無いからなのか余計に清々しかった。母はさつき作ったおれ手製のパンを頬張っている。

おれも自分用のパンをカウンターで口に含む。

傍らの牛乳は母にとって必需品だ。

それを一気に飲み干しカバンを肩にかけ立ち上がる。

「ああ。皿、置いていいよ、おれがやっとく」というと母は「ありがとう」といった。

それからいそいそと玄関へ向かっていった。

おれは大きく一言「いつてらっしゃい」といって皿をキッチンへ持っていく。

シンクの中に皿を入れカウンターの自分のパンにがついた。

綺麗に食べ終わるとすぐに皿洗いをすることにした。

綺麗好きというわけではない、後でやるのが面倒くさいのだ。

面倒くさがりなだけ。

数分で片付け終わるとテレビのリモコンを探し出す彩。

そろそろ朝の気になる番組が始まる時間なのだ。

いつもはDVDに録画してるが今日は生で見れる。

それだけで心は有頂天。

番組の内容はただのバラエティー番組。

何が面白いのかクラスメイトには理解されない。

でも那須にはわかるみたいだ、よくその話で盛り上がる。

今日のゲストは今巷で有名になりつつある漫画家。

彩は知らない、表情を見る限り他の有名人も知らないみたいだ。

その人の作品がテレビに映る。

それが目に入ったとき彩は思った。

「これぐらいならおれ方がうまいな」と。

すぐに日は暮れていった。

テレビの魔力、おそるべし。

昼飯もテレビ、見ながら食い。

食ったものを憶えていないのがその証拠だ。

夕方のニュース番組、合間のコマースシャルでふと気がつく。

部屋は薄暗くテレビの光が一番明るい状態。

よつと立ち上がりカーテンを閉める、リビングの電気をつけた。

それからテレビを消し洗った皿を棚に戻した。

その足で二階の自分の部屋へ向かった。

階段を上がっていくがあるのは暗闇のみ。

真つ直ぐ前を向いて進んでいく、手は寒さのせいでポケットの中。

その時、どこかのドアが開く音を聞いた。

聞いてしまったのだ。

歩みは止まり心臓が急速に速くなる。

目は泳ぐ、眉は集まる、顔は強ばる。

数秒経ちそれでも何も無いので自分の中の緊張の糸が緩んでいく。

一步を踏み出した瞬間だった、何かに前方から押されたような衝撃

が体にくた。

それから彩の視界は一瞬で暗くなった。

目の前に映像が戻ってきたとき彩は階段の下にいた。

しりを打ったみたいで多少ひりひりする。

首も痛めたらしい、良く曲がらない。

彩は階段の頂点を見上げた、もちろん何も無い。

腰をかがめ首と腰に手をやりゆっくり上っていった。

今度は難無く一番上までついた。

それから自分の部屋の前まで戻った。

しかし、何かが不自然だった。

ドアには見たこともない焦げ茶色のしみ。

引き目で見ると手形のように見えなくもない。

それに触れたとき自分の部屋のドアが少しばかり開いているのに気

がついた。

押すと扉が閉まったのだ。

彩はもう一度閉まったドアを開けることにした。

9 話

つばを飲み込み取っ手に手を触れる。

取っ手を捻りゆつくりとドアを引いた。

少し開いたところで引くのをやめ、中を覗いてみる。

いつも通りの自分の部屋、明かりがついてないだけ。

それでも用心して辺りを見わたす、でも本当にいつも通り。

肩を撫で下ろし部屋に入りベッドにダイブする。

相変わらずふかふかしていた。

それから体を起こし机に座ってスケッチブックを取り出す。

鉛筆を取ろうとしたがその瞬間に書く気が失せてしまった。

ふうとため息、椅子から立ち上がりまたリビングへ戻っていく。

階段を下りる際つい先の出来事から用心深くなってしまうている自分がいた。

自分の家なのに気が抜けないのはどうかと思って笑みがこぼれた。

下へつき晩御飯の仕度をする。

手際はあまりよくないが1時間程度でなんとか完成。

テーブルに運びテレビのをつける、「いただきます」これだけはきちんと言う。

40分程度時間が過ぎ食事が終わる。

「ごちそうさまでした」これもちゃんと言う。

すぐ食器を片付けテレビはつけっぱなしで2階へあがる。

もうすこしで楽しみにしている番組が始まる。

それになんとしても間に合わせようとシャワーを浴びる準備をしにきたのだ。

今度は難無く階段を頂上まで上がりきり自分の部屋へ入った。

すると一瞬で目の前が明るくなる、顔を強ばらせて部屋を見るがなにもない。

そのままの顔で周りを見わたす、どこまで続いているのか分からない

ほど真っ白だった。

少し光にもなれ目をきちんと開く。

脳に入ってきたものは一面真っ白なところだった。

しかし上だけは灰色、向こうに地面との切れ目を発見する。

もう近いのか遠いのかさえわからない程になっていた。

とりあえずその場から動かずに静かにしてることにした。

灰色の空は雲も無くただベタ塗りでそれ一色だった。

時計が無いのでどれぐらいの時間がたったかわからない。

それでも自分の中ではもう1時間ほど経ったのではないかという考えが出ていた。

黙っていても何も起こらない、それなら動いた方がまし。

そう思い立つとすっと起立し右を向いた。

そして何のためらいも無く歩き出した。

歩く歩く、どこまでもいける気がする。

遂には走り出してしまった。

でも景色と言うものがないのでどれほど来たのかが分からない。

ただ、息切れをしたただけだった。

体力を消耗したただけだった。

そう頭で思うとその場に大の字で仰向けに倒れた。

目を閉じる、聞こえるのは自分の息、心臓の音。

その少年はそのまま眠りについた、これは夢だと思って。

しかしその少年を見つめる5つの人がいた。

彼は全く気がつかないらしい、爆睡しているようだ。

一人の人が彼を見ながら言った。

「これが我が。今とは全くの別人だな」

すると「うむ。わたし以上の頭脳も持っていないらしいな。顔でわかる」と違う人が言う。

「しょうがないだろ。今はこうなんだから」と彼と同じぐらいの人が言う。

他の4人はうんと首をかしげ不満そうにしている。

「でも意外と私、好みかも。良かったいかつい男じゃなくて」と4人目の人が話す。

それに便乗して最後の一人が喋りだす。

「そうね。でも・・・貧乏そう」と。

「貧乏のどこが悪いのよ」と反論のように嫌みたらしく言い放った。

「あら。とういうことは貴女のがうつったのかしら。可哀想に・・・」と笑みたつぶりで言う。

「・・・あんた生意気にも程があるんじゃないの？」と怒りをあらわにする4人目の人。

「年下がいきがってんじゃないわよ！」と怒鳴ると「私の身分・・・分かっていらつしゃいますか、娼婦さん？」という。

そろそろ危ない感じが漂ってきたので、3番目に声を出した人がなだめる様に言った。

「まあそれぐらいにしてくださいよ。それよりこれからのことですが・・・」

こう話を始めると他の4人も静かになりこちらを向いた。

「最初は・・・そうですね。一番古いあなたからということでしょうか？」と賛成をとると全員一致で可決した。

皆をまとめた人がゆっくり立つと白と灰色の世界で眠っている彼の周りに手で作ったドアを一つ置いた。

そして先ほど指名された人が灰白の世界へ入っていった。

灰白の世界では無い4人の人たちはそこに入ってしまった人に祈りを捧げていた。

無事なようにと。

1話

眠っている男の上の空が丸く開きそこから一人の男がゆっくり落ちてきた。

彩は眠っている、かなり深そうだ。

降ってきた男は横になっている彼をまじまじと見つめて一言いった。「良く眠っているようだが、そろそろ起きてもらわんなあ」と。そういつた後腕を組み、しゃがみこみ、一つ呼吸を入れ大きく息を吸い込んだ。

そうしながらこう思った、こんなやつに手を使う必要はないなと。くつと息を止め空を仰ぎ思いっきり下に頭を振り下ろした。

下には彩の寝顔。

鈍い音と共に眩しそうに目を集めて起き上がる。

元の体勢に戻っている男は言った。

「ほお、案外聞くものだな」と口元のみの笑みを浮かべた。

その声に辺りを頑張って見わたしていた彩は気がついた。

まだきちんと開けていない目をして顔を向けると腕を組んだ男から悪口が飛んできた。

「何だその顔は。オチャラケもここらで仕舞いだ、立て我が奴隷よ」下目使いで彩に話す。

奴隷の辺りにプチツときたのでこちらからも皮肉たつぷりに質問してやった。

「もともとだ。それよりあんたは何様なんだ？普通の高校生を奴隷呼ばわりとは人間が腐ってるな」

膝を突いてゆっくり立ち上がりむかつく男と顔を並べた。

寝起きのせいもあるが顔はやけに怖くなっていた。

それでも相手は全くひるまずこう返してきた。

「貴様、私の名を知らんと言っのか。愚かよのお。では名乗ってやる、しかとその耳、そして頭に刻み込むがいい」

そういうと組んでいた腕をほどき片手で彩のあごを、もう一方で彩の髪の毛を素早く掴み自分の懷まで無理やり持ってきた。

あまりに一瞬だったんで抵抗する暇も無く向かい合っていた男の懷に顔が入った。

髪の毛の引つ張り方は優しくて引き寄せるときの痛みを生じた。

そして上から見下ろされこう言われた。

「我の名は、アルドビネス。ギウム国の王である」と。

ついついぼおっとしてしまった、いやあきれてしまったのだ、こんな冗談に。

そういう風に彩の脳みそは行動してしまった。

なんでそうなったか。理由なんてのは簡単で、こんな時代に一国の王だと名乗る方がどれほど少ないことかなんて誰でもわかる。

しかもここは日本だ、そんなことを言う様なやつはほぼ全員馬鹿とみなされる。

こんな考えもあつてか彩は「あ、そ」といつて掴まれていた手をどけた。

そして手櫛で髪の毛を整えた後にんまりと笑って目の前のやつを突き飛ばした。

両手両足をつかされたアルドビネスは怒りを顔に溢れさせたがそれは彩には見えなかったらしい。

男一人を突き飛ばした後すぐにこう言った。

「おれは西崎 彩。名前だけ教えとく。せいぜいその馬鹿げた冗談をそこで吐いてればいいさ。おれは行くよ」といつて歩き出す。

それを見たギウム国王が大声で笑い出した。

中々のうるさい耳障りな声が彩の耳に入ってくる。すごい形相で振り返るとあることに気がついた。

ここはあの灰色と白色の世界だったって事を。

多少の回想のあとやつを睨みつける。

笑っているやつ横には寝る前までには見当たらなかったドアがあった。

疑問を抱いて、それでもすたすたと歩み寄ってドアを開こうとする
と、その手をがっちりと掴まれた。

「なんだよ。お前は関係ないだろ！」などという腕をつかんで
きた方は、「勝手に開けるな。これは俺のドアだ」と返してきた。

わけも分らないし、しゃくではあったが仕方なくそいつに尋ねた。
「どういうことだ？」と。

すると彼は先ほどまでの笑いが嘘のように真剣に話した。

「その扉は私の過去に帰ることができる扉。そして貴様は信じない
だろうが、私は貴様の4つほど前の前世である」

頭の中にはどんどん疑問ばかりが詰まっていく。

そんな彩をよそに話を続ける一国の王。

「そしてギムという一国の王であることは真実だ。貴様は信用し
ないかもしれないがな」と彩の目を鋭く見つめながらまだ続けた。

「貴様は今、監視されている。貴様の全ての前世にな。これも事実
だ」という。

彩はその言葉を聴いて辺りを見回してみたが誰も見当たらない。

その行動を見ていた王が口を尖らせて人差し指を立てた、そして言
う。

「上だ。貴様は本当の阿呆だな。貴様が眠る前まで回りに人がいた
のか？良く考えてみる」

立てられた人差し指を目で追って上を見た。

何かやつが喋っている、あまり良く聞こえない。

すぐに顔を戻して質問をした。

「あんたは何のためにおれをここに呼んだんだ？まあ、あんたの話
からすればあんた“たち”となるのだろうがな」相手の目を見て喋
った。

すると鼻で笑い一言言った。

「貴様は貴様の前世たちの願いを叶えるために呼ばれたのだ」と。

2話

「はぁ・・・」としか口から出てこなかった。

なんで自分が前世たちの願いを叶えなくてはいけないのか、わけが分からなかったから。

その疑問を直球にしてどこぞの王にぶつけてみる。

返ってきた返事は素っ気無いもので「そんな理由は知らん」と言うことだそうだ。

それから王様は先ほど彩が開けようとしたドアの前に立ち言った。

「おい、早くしろ。さっさと行くぞ」と。

さすが金持ち、自分中心のばかりやろう。

彩は心の中でこっそりつぶやいた。

ゆったり歩いてやつの隣につくとやつはおれと肩を組んできた。

ほどこうとやつの手に手を掛けるとやつから一言。

「こうしていないとお前はどこかに飛ばされて大変なことになるかな。死んでもいいならほどくがいい」こっちを見ながらそう口が

動く。

小さい声で「はいはい」と言いながらほどのくのをやめた。

今の言葉を聞いて内心、ぞくぞくしてきていた。

不安と恐怖と楽しさと、なんだか色々混ざり合ったものだった。

そんな心境を察したのかやつは大声で笑っていった。

「お前でも緊張するのだな」と。

おれも負けじと大声で笑い「そう見えるなんて、あんたの目には風穴が開いているようだな」と言い返した。

やつのおかげと思うとしゃくなので、やつのせいで少しばかり緊張が和らいでしまったなどと思うようにする。

それからやつは戸を開け始めた。

開いたその先にはなんともいえない光景が広がっていた。

人の記憶の断片が画像となって色々なところに張り付いている。その光景に圧倒され突っ立っているとやつがおれの肩を引っ張った。やつと一緒にドアの中へ落ちていった。

地面があると思ったおれはまた呆氣に取られた。

下は見えないほどで、全く地面が見える様子が無い。

今そこを飛び落ちている二人。

恐怖は全く無い、ましてや面白いと思えるほどだった。

ある程度落ちたところで落下は止まった。

透明な床がそこにできていたみたいだ、二人でうつ伏せに倒れている状態。

互いに立ち上がり周りを見わたしてみた。

ドアを開けたときとほとんど変わっていなかった。

その中に自分の探し物があつたのだろう、王はうれしそうに叫んだ。

「あつたあつた。これだ」と自慢げに指を刺す壁は真っ黒だった。

「何も映ってないぞ。本当ならここに記憶の一部が映像化されるんだろ？」真っ黒の壁を指差して言った。

そうすると王は「これはまだ眠っている時のはずだ」と言う。

無言で2回程度頷きやつに歩み寄っていった。

壁の前に立ったところでやつから忠告としてこう言われた。

「この中に入ればお前は幽霊と化す。我にしか見えない幽霊だ」おれに指を刺して話を続ける。

「そしてお前の使命は、助言のみだ。自由に行動してもいいが我の時代には霊能力者が沢山いるからな、精々気をつけることだ」と。

意外と簡単そうな内容に肩を撫で下ろす自分がいた。

そんなおれを見たやつはこう付け加えた。

「霊能力者を良く分かっておらん、お前。やつらは霊を呼んだり戻したりできる」と言われるがさっぱり分からない。

それが顔に出ていたのかやつはため息をついた。

「なんだよ」と言うやつはこう返した。

「つまり、霊をこの世に引っ張り出したりあの世に送ったりできる

ってことだ。さっきも言ったがお前はこれの中に入ると霊になる」
うんうんと頷きながらやつを真剣な顔で聞く。

「まだわからないのか？どれほどの馬鹿者だお前は。こちらの地である世に送られれば、お前は現世での存在が消えると言うことなんだぞ」と言った。

やつと事の重大さが身に染みてきた。

そのせいで少し顔が強ばる、膝が笑う。

人生で初めて膝が笑った瞬間だった。

また特大のため息、その後に言葉を残した。

「ただ単に見つからなきゃいい。あともう一つ大変なことを教えておく」そんなことを言うので心臓が早く脈打ちだす。

こう続けた、「過去を盛大に変えると自分がいなくなるかも知れないからな。この2つのことを肝に銘じておけ」と。

改めてこの仕事、と言うよりは強制労働は自分の命を掛けてやることらしい。

高校生のおれには荷が重過ぎる、絶対そうだ。

そんなの関係なしにやつが勝手に真っ黒の記憶に入っていく。

心の準備も中途半端なままおれもその真っ黒な記憶に足を踏み入れた。

少しひんやりした感触の後にフツと暖かくなり最後の頭が入ると、

後ろには何も無くなり真っ黒な空間に取り残された。

でも一点から光が差し空間の中も明るくなった。

その時、彩の心はがっちりと自分の決意で固まった。

3話

眩しさから目を開くとそこには王の姿は無く、露天ばかりが両脇にまっすぐ並んでいた。

その時、前から小さい子どもが走ってきた。

よける暇が無く子どもは彩の体にめり込み、何の障害も無くすり抜けていった。

「・・・ほんとに幽霊になっているのか」と半透明な手を見ながらつぶやいた。

左右を見わたす、見慣れない黒っぽい肌が彩の前後を行きかう。前にも後ろにもなじめない顔の人たち。

見上げると視線の先には大きな宮殿のようなものがあつた。

堂々とそして下からのオレンジの光で怪しく建っていた。

頭はあちらこちら動きながら、足は一直線に大きなアレに向かっていた。

露天の内容は食べ物やら装飾品やらが綺麗に並んでいた。

欲しい気持ちもあつたが見ているだけで楽しかった。

露天が終わりまで来ると目の前に幅広い階段が広がっていた。

そういえば今まで店に気を取られ忘れていたこと、足が完全に無い。頭では足は動いている。

でも見えない。

少しこんがらがっている頭を落ち着かせて、階段を上っていった。すーっとあがつていく自分がなんだか面白くなってしまった。

全くつかえずエスカレーターの様。

階段を上り終わり、上を見上げると無意味に高い天井が出迎えた。王の宮殿だと思っていたここはただの通行用道路だったようだ。

きっとこれで色々と町を仕切ったりしているのだろう。

「そういえば・・・」とあることを思い出した。

マンガで見たことだが、幽霊は空を浮遊できる・・・という。

やり方なんて知らない、とりあえず小さくジャンプしてみた。
足が無いので感覚が掴めず、浮いているのか全く分からない。
目に見える変化が欲しい、そう思っただけで思い切りジャンプしてみた。
なんだか少し天井が近くなった様な。

顔を正面に戻してみる、さっきまでいた人々がいなくなっている。
下を見てみると、そこには縦横無尽に行き交う人々がいた。
ほんとに浮ける様な。

マンガの知識が初めて役に立った瞬間だった。

そのまま上に上がっていく。

一枚、壁の向こうは開けた空間があった。

そこには人が数人外を眺めていた。

その時外を見ていた一人が口を開けた。

だが音は出ているのに何を言ってるのかわからない。

それでもその音に反応して他の人がなにかを言い返す。

数秒見ていたが飽きたので宮殿に向かうことにした。

そこらを見下ろしながらうろろろすること数分、ようやくそれっぽい建物を見つけた。

異様に広いこの国を上から見下ろしたため息が出た。

「ああ、ムダだなこれは。広すぎるつてもあれだな、うん」

一人で喋り一人で納得する自分がいた。

不意に何かが下から飛んできた。

体を斜めに傾けそれをかわした、しかし全く方向違いの方からも何かが飛んできて体に当たった。

そう体に当たってしまった。

そうすると四方八方から沢山の何かが投げられた。

そんな時頭に思い浮かんだことが王の言った言葉だった。

「自由に行動してもいいが我の時代には霊能力者が沢山いるからな、精々気をつけることだ」と。

彩はばつちり彼らにばれてしまったのだ。

飛んでくるものをなんとかかんとか体をよじりながらかわして行き、
宮殿に急いだ。

宮殿が目の前に来るまで何発か当たってしまっていた。

王の場所など知らされていないので窓からそこに突っ込み中を右往
左往した。

左に曲がり、右に曲がり、階段を下り・・・。

全く人に会わなかった、誰一人として視界に入ってくれなかった。

物音もしない通路を進んで行き十字路が見えた。

頭で考えるより先に左に曲がった。

そしてそこで何かとぶつかった、また体に当たったのだ。

生唾を飲み込み上を見上げる。

そこにいたのは目を点にした王だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9358p/>

膨大な過去の一点(きらめき)

2011年1月8日20時08分発行